

兵士の思い、家族の元へ 旧陸軍「東部62部隊」のはがき寄贈 米NPO代表と市民有志ら交流

2023年4月28日 06時59分

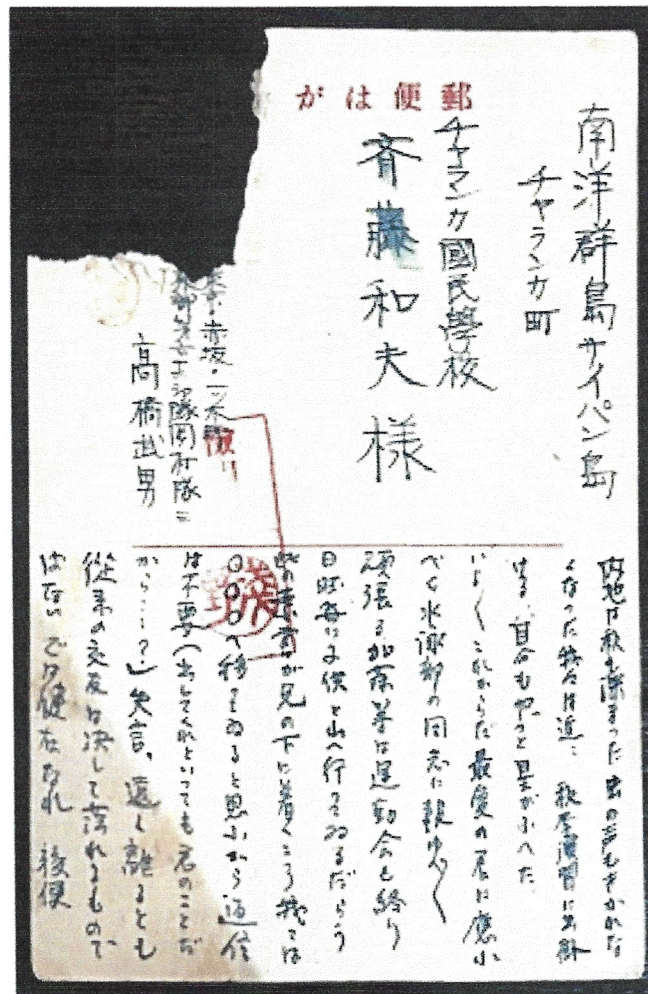


みやまえ・東部62部隊を語り継ぐ会のメンバーらと懇談するジャガードさん（左から2人目）＝宮前区で

米国のNPO法人「キセキ遺留品返還プロジェクト」のジャガード千津子代表が今月、川崎市民ら有志でつくる「みやまえ・東部62部隊を語り継ぐ会」と交流し、戦時中に宮前区などで活動していた旧陸軍の歩兵一〇一連隊（通称・東部六二部隊）の歴史を学んだ。二年前に同部隊の兵士のはがきを同会に寄贈したのが縁だが、この兵士の終戦後の詳しい足取りは分かっていない。同会は「ご家族や関係者に届けたい」と情報提供を呼びかけている。

（竹谷直子）

同会によると、戦時中、現在の宮前区宮崎から高津区梶ヶ谷にかけての丘陵地に、東部六二部隊の軍事施設があった。この部隊は一九四二年に東京・赤坂から移転をし、県内を中心に召集された兵士たちを短期間訓練し、数万人を外地に送り出したという。



はがきの表面

はがきは、同部隊に所属していた高橋武男さんが差出人で、日本にいた四二年秋ごろに書かれたものとみられる。宛先には、サイパン島の「チャランカ国民学校 斉藤和夫様」とある。「近々秋季演習に出掛ける」「いよいよこれからだ。最愛の君に届うべく水泳部の同志に報ゆべく頑張る」などと記されている。

裏面の絵は、日本の攻撃で難民になった中国の人たちを描いた「戦争画」という。はがきの調査をした同会事務局の山田謙さん（72）は「宛先の斉藤さんとの仲の良さが伝わってくる。『星が増えた』と書かれているのは、二等兵から一等兵になったことを示しているのでは。毎日の厳しい訓練を乗り越えてきたことがわかる」と読み解く。



はがきの裏面

太平洋戦争では、日本軍と戦った米兵らが日本兵の遺品を記念品として多数持ち帰った。はがきは、日本の委任統治下にあったサイパン陥落で、米兵の手に渡ったとみられ、元米海兵隊員の孫娘が保存していた。長年戦争の遺留品を返還する活動に取り組んでいる米イリノイ州在住のジャガードさんが二〇二一年四月、同会に寄贈した。

このはがきは二二年十二月、川崎市教育委員会が法令や条例に基づく指定がされていない文化財を対象とする顕彰制度の「地域文化財」に選ばれた。市教委の担当者は「東部六二部隊のものは、演習場を示す石柱と市青少年の家にある灯籠くらいしか残っておらず、価値がある」と評価する。

高橋さん是一九四三年四月、中国の南京西方に派兵されたとみられる。敗戦後の四六年一月に高橋さんが所属した部隊は帰国したが、生存者は六割と言われ、高橋さんが帰国したかどうかは不明という。

今月中旬に来日したジャガードさんは「さまよっている兵士たちの遺留品を最適なところにお返しするのは使命。一種の鎮魂の意味もある」とはがきへの思いを語った。同会の大泉雅彦代表（68）も「旧日本軍もアジア各地で現地のものを戦利品として略奪してきた。はがきは、ご家族や関係する方の元へ返るのが一番」と話し、関係者の情報を求めている。問い合わせは同会事務局＝電090（8775）1879＝へ。